

近代イギリスにおける消費文化としての服飾と女性
—ファッション雑誌・カタログから浮かび上がる女性の社会意識の考察—

Women and Clothing as Part of Consumption Culture in Modern Britain: Studies on Women's
Social Consciousness as Emerging through Fashion Magazines and Dress Catalogues

大石 和欣^{*1+}, 菅 靖子^{*2+}, 眞嶋 史叙^{*3+}

Kazuyoshi Oishi^{*1+}, Yasuko Suga^{*2+}, Sinobu Mashima^{*3+}

*1 東京大学大学院総合文化研究科 東京都目黒区駒場 3-8-1

Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo,

3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo, Japan

*2 津田塾大学英文学科

Department of English, Tsuda College,

*3 学習院大学 経済学部

Faculty of Economics, Gakushuin University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: Our research of the academic year 2012 started with the reviewing of outcomes and problems as they became clear at the international conference 'History of Consumer Culture: Genealogies of Curiosity and Material Desire: How has consumer taste been constructed?', held at Gakushuin University in March 2012. Each of the three researchers clarified and reviewed various issues raised by participants and discussants during the conference and discussed how to update and conduct our researches in a more effective and efficient manner to improve their qualities and gain more satisfactory results.

After revising her paper on Mrs. Peel, Suga returned to her research on photography and poster designs in relation to fashion media in the 1930s and made some intensive research during the summer. She gave a lecture at "LENS 2012: Out of the Shadows", hosted by the National Library of Wales, 23-24 November 2012. During the above conference, she met invaluable information on Ifor Thomas (head of Photography Department at Reimann School) and his educational principle and philosophy of photography. It has opened up a new perspective upon the education and practice of commercial photography after WWII, as well as before WWII. Oishi continued his research on fashion magazines in the late nineteenth century and then moved to those published in the early nineteenth century. His main focus was on the relationship between the pre-Raphaelites, aestheticism, and the rational dress reform in the 1870s and 1880s, and also on its impact upon the representation and advertisements of fashion in the magazines. He extended his research towards the early twentieth century. He took a research trip to UK in February to finalise his paper

*1) oishi@boz.c.u-tokyo.ac.jp

on women's consciousness and fashion magazines between the 1870s and 1920s. Mashima has been working on the trade and industry of clothes in the late nineteenth and early twentieth centuries. She researched on designs, qualities, export quantities and destinations of fashion textiles before WWI and between WWI and WWII. This was designed to examine the situation of textile industry, which supported the British fashion system, from its prime time to the declining years. Her main interest was to analyse the establishment of textile industry in British colonies and the local demands of textiles there from various viewpoints, in particular, the rivalry between them and the Japanese textile industry which began to increase its export rapidly to Asian countries.

要旨: 2012年の調査は3月に学習院大学において主催した国際学会「消費文化の歴史-好奇心と物質への欲求の系譜-消費の嗜好はどのように形成されてきたか?」での成果と問題点について吟味することからはじめた。学会中に参加者などから提起されたさまざまな問題点を明瞭にし、最終年度である本年の調査を効率的かつ有効なものにし、成果の改善を追求するようにした。

菅は、LENS 会議において Reimann School の写真科長であった Ifor Thomas の教え子との交流から Thomas の写真哲学、教育方針に関する貴重な情報を得た上、戦前だけでなく戦後のイギリスにおける商業写真の教育および実践の発展を戦前からの流れのなかで探るといふ新しいテーマにつながる学術的刺激を受けた。大石は 19 世紀末のファッション雑誌についての調査を継続しながら、20 世紀にまで射程を広げた。とくにラファエロ前派と衣装改革との影響関係、消費文化との関係に注意を払いながらファッションの表象と広告について、どのような女性の意識の変化がありえたかを調査した。2 月には渡英調査を行いこの点についての報告論文を書いた。また眞嶋は、イギリスのファッション・システムを支えた繊維織物産業の絶頂期から衰退期かけて検討するために、第 1 次世界大戦前と戦間期のファッション・テキスタイルのデザインや風合い、輸出量、輸出金額、及び輸出先について調査をした。イギリス領植民地における繊維織物産業の設立と現地での織物需要の変化について多角的にとらえて分析し、特にアジア地域では急速に輸出量を伸ばしてきた日本の繊維織物産業との競合関係について、検討した。

配当決定額

平成 22 年度	1,015,000 円
平成 23 年度	1,251,000 円
平成 24 年度	1,214,000 円
合計	3,480,000 円

研究の目的

本研究は、イギリスの主に 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、既製服の流通が始まり、やがて大量生産時代に至る過程で、一般の女性たちがどのような社会意識を持って服飾を購入し、どのような服飾文化を形成するにいたったかを、ジェンダー研究の一端として、社会史、経済史、デザイン史の異なる三領域から吟味することが目的である。大量個人主義の傾向がみられる現在の消費文化と対比して、この時代のイギリスにおける服飾デザインは比較的画一的なものであり、衣装の流通規模は小さいとみられがちであるが、実は大衆レベルにおいても流行や社会慣習に従いながらも個人の趣味と意識を繊細に反映

した多様なものであったと考えられる。その実態をファッション雑誌やカタログといった流通に関わる資料を吟味することで領域横断的に浮かび上がらせていった。

そもそもイギリス近代における服飾の領域横断的な学術調査はこれまで英語圏でも例がない価値ある研究である。今回の研究では、消費文化としての服飾への「女性の意識、とくに貴族階級ではなく一般の女性の意識に考察対象を絞り込み、その社会的位置づけを行うことで、世界的にみても斬新な視点からイギリスの服飾文化の実態を明らかにできると考えている。イギリスの社会史、デザイン史、経済史という領域を違えながらも近接したテーマで実績をあげている研究者が同じ文化現象を考究することで、従来のジェンダー研究や単一領域では明瞭にできないイギリス近代の服飾文化における女性の役割と消費との関わりの実体を浮かび上がらせることができた。19世紀において「家庭の天使」として家庭内に押し込められていたと考えられがちな女性たちは、没个性的で、社会的慣習にしたがった服装に抑圧されたわけではなく、流行に敏感に反応し、海外を含めた服飾(素材)の流通の中で商品としての服飾を消費し、個性を顕示していた歴史的過程が浮き彫りになる。国際シンポジウムの開催・参加等や学術誌への投稿を通して、国際レベルで成果発表を行うことで、関連領域にも意義ある成果を出したつもりである。

これまでイギリス社会史やジェンダー研究の領域において、庶民レベルにおける服飾文化と消費文化との相関性についてはあまり顧みられてこなかった。その先駆的な研究をあえてイギリス文学と社会史、デザイン史、経済史の領域を違える研究者が共同して行うことで、斬新な領域横断研究のモデルを日本から海外に発信できる研究成果をあげることができる。さらに、19世紀後半から20世紀初頭にかけての庶民の女性とその消費活動、それらと服飾文化の関係の歴史的実像を明らかにすることで、現在における女性の服飾消費の状況を分析する際に必要不可欠な比較検証、参照のための題材を提示することができた。

研究の方法

本研究プロジェクトでは、イギリス服飾史において既製服の流通が飛躍的に拡大していく時代、すなわち19世紀後半から20世紀初頭を取り上げ、そこで大きな影響を与えたファッション雑誌やカタログを主な実証研究の対象とし、そこから浮かび上がる女性たちの社会意識の変容とたどっていく。中流階級以下の庶民レベルを主な考察対象として絞り込むことにするが、一方でオートクチュール・デザイナーの躍進という新たな服飾文化の出現も視野に入れながら、ファッション雑誌やカタログが女性たちの欲求をどう捉え、またそれが社会的にどのような意義を持ちうるのかを歴史的状況を考慮しながら検証して行く。1980年代から確立されてきたジェンダー研究業績を参考にしながらも、実証的な手法を基本にし、3人の研究者がそれぞれの立場から、文学研究、文化論、経済史のアプローチを組み込むことで、女性の服飾消費の意識に関して歴史的・社会的な位置づけを行いたい。とくに流通に関しては、経済史を専門とする眞嶋がデータ分析を担当する。関連資料が国内に希薄であると考えられるため、マイクロフィルムでの購入・閲覧と同時に、海外での資料調査も行い実証的な裏付け作業を行っていく。

研究の実施計画

[22年度]

既製服の流通による女性の服飾消費と社会意識の変容を、流通のデータおよびファッション雑誌やカタログを検証しながら考察するために、今年度は特定のデータやファッション雑誌、カタログに焦点を絞った

から、収集と分析を行っていくこととする。

大石は、まず 12 月までに、19 世紀後半の雑誌やカタログの中から社会史的かつ文化史的に重要と思われるものを精査しながら、同時に国内でも閲覧可能なオスカー・ワイルドが編集した *The Woman's World* (1888-1890) を調査する。当時の女性の社会的立場とファッション意識についての審美的考察について調査を行う。その後 3 月までに、それと関連を持った当時の文学作品などに見られる女性の服の表象を記号として解読し、これまで社会史の領域において明らかになってきている 19 世紀後半の女性の生活習慣やジェンダー的役割を比較参照することで、その服飾の社会的意義について明瞭にする予定である。国内にない資料でありかつ常に参照すると思われるものについてはマイクロフィルムあるいは複製版等で購入をする。『パンチ』をはじめとした庶民的な眼差しを掲げる新聞メディア、「新しい女性」をテーマにした小説における既成服に対する意識については、国内図書館での調査が可能であり、研究打ち合わせのために上京した折に 3 回ほど調査を行うこととする。それでも調査できない資料については 2 月に渡英し、1 週間の調査を行う。

菅は、12 月までに 19 世紀後半の女性雑誌にみられる裁縫のプロ以外が提案した女性の服飾について考察を行い。既製服の意味も改めて問い直す。3 月までには、オリエンタリズム、審美主義のデザインの側面とファッションとの連関を、当時のさまざまな家庭雑誌の中に調査することとする。調査は主に国内調査で可能であるが、補助資料として複製版を含む当時の雑誌(『女性ジャーナリストの誕生: 英米 19 世紀末～20 世紀初頭の文献集成』全 4 巻)を消耗品として購入したい。

眞嶋は、フランス・パリにおけるオートクチュールの成立を近代的なファッション・システムの起源とする既存の服飾史の視点を再考する際に、イギリスの服飾業界誌として歴史が長く、最も信頼されてきた *Drapers Record* を資料として利用して、供給システムの実証研究をおこなう。また、家計調査データの乏しい 19 世紀末における消費実態を明らかにするため、*Old Bailey* の犯罪裁判記録を用いて、盗品の中における家財としての衣服の記述を分析しファッション意識の普及を調査する。大英図書館 *Newspaper Reading Room* (Colindale, London) への海外出張を年度末に予定している。

それぞれの研究成果について 10 月末、12 月、3 月に研究会を東京で開催することにする(大石の旅費については、上記国内調査を一緒に行うため計上済)。また、来年度の国際学会に備えて、研究打ち合わせに合わせながら論文を準備していく。国際学会のポスター制作を 12 月までに行うこととする。

[23 年度]

既製服の流通による女性の服飾消費と社会意識の変容を、流通のデータおよびファッション雑誌やカタログを検証しながら考察するために、調査対象を昨年度からさらに拡大して、19 世紀末を中心としながらも、20 世紀初頭まで含めたデータやファッション雑誌、カタログの資料収集と分析を行い、論文を執筆していくこととする。年度末(3 月)には国際学会を開催し、これまでの調査結果の中間発表と学術的な場での成果検証を行うこととする。

菅は、既製服が流通する一方で、女性雑誌に付録として付けられたパターン(型紙)が 19 世紀後半において、どのように流行のデザインを取り入れていき、女性の服飾への意識の変容を助長することになったかをデザイン史の観点から探っていく。平成 22 年度の研究成果を基にしながらも、さらに調査対象を拡大し、国内での資料調査を継続しながら、国内にはないパターン(型紙)の資料調査のために夏期に一週間程度のイギリスでの渡航調査を行う。19 世紀末の女性雑誌にみられる裁縫のプロ以外が提案した女

性の服飾について考察を行い、既制服の意味も改めて問い直す。また、可能な範囲内で、オリエンタリズム、審美主義のデザインの側面とファッションとの連関を、当時のさまざまな家庭雑誌の中に調査することとする。こうした調査結果を3月の国際学会において発表する。

大石は、19世紀末に登場する「新しい女」像について調査を主に行うこととする。菅の研究成果を確認しながら、新しいデザインを取り入れていくパターン(型紙)や既制服に対して、「新しい女」たちがどのような消費行動をとったのかを明瞭としていく。とくに同時代の雑誌とカタログ、さらには小説などの作品といった言説の中に女性たちの服飾意識の変容をたどっていくこととする。基本的に国内での調査を遂行していくが、3月末の国際学会には、消費文化としての服飾消費がこうした「新しい女」たちにとってどのように捉えられていたのかについて研究発表を行う予定である。国内調査および打合せのための旅費、「新しい女」に関する復刻版資料の購入を計上する。

眞嶋は、昨年度末に収集した *Drapers Record* の資料の分析を継続しながら、フランス・パリにおけるオートクチュールの成立を近代的なファッション・システムの起源とする既存の服飾史について、供給システムの実証研究をおこなう。同時に、19世紀末における消費実態を明らかにするため、*Old Bailey* の犯罪裁判記録を用いて、盗品の中における家財としての衣服の記述を分析しファッション意識の普及を考察する調査も継続する。マイクロフィルム資料と国内調査費を計上。

それぞれの研究成果について研究会を東京で開催することにする。また、年度末に講師を海外より招聘し、成果発表のための国際学会を開催する。

[24年度]

既制服の流通による女性の服飾消費と社会意識の変容を、流通のデータおよびファッション雑誌やカタログを検証しながら考察するために、調査対象を昨年度からさらに拡大して、20世紀初頭まで含めたデータやファッション雑誌、カタログの資料収集と分析を行い、論文を執筆していくこととする。年度後半には、これまでの調査結果を報告書・論文集の形でとりまとめ、成果検証を行うこととする。

大石は、19世紀末に登場する「新しい女」像についての昨年度までの調査を基礎にして研究を進めながら、それを受け継ぐ形で20世紀初頭のイギリス・エドワード朝期の服飾がどのように文学作品や雑誌、ジャーナルの中に表象されているか、あるいはそこからどのように離反する形で表象されているのかを検証することで、服飾に対する女性の意識を探り出していく。8月に中旬に海外調査を行い、昨年度できなかった「新しい女」像に関する一字資料文献調査、国内では調査不可能な19世紀末および20世紀初頭のファッション雑誌やカタログを調査する。また、神戸での学会発表を予定する。

菅は、イギリスにおけるファッション・フォトグラフィの発展をテーマとして研究を進める。とりわけ1930年代にドイツから入ってきたノイエ・フォトの実践が行われたライマン商業美術学校におけるファッション・フォトグラフィに関するデザイン教育の解明を目指す。その中から女性の服飾意識を問いたです。11月にはこの学校の写真科の教師であった *Ifor Thomas* にかんする展覧会および講演会に参加し、アーカイブを調査の上発表する。そのための海外出張旅費を計上する。

眞嶋は、イギリス植民地におけるジャーナル等を分析して、イギリスのファッション産業が海外輸出していた商品について、輸出額、流通経路、そして白人女性消費者の購買パターンなどを調査する。オーストラリアやニュージーランドの女性誌、それからアジアティック・ジャーナル、それからノース・ボルネオ・ヘラルドなどすでに調査済みのものもあるが、必要があれば再度可能な範囲で引き続きこれらの資料調査

を行いながら、植民地への繊維織物およびファッション輸出についてももう少し明らかにしていく。イギリスからの繊維織物の流入によって、いかに現地人による伝統的な手織織物産業が衰退していったかという点についても、ジャーナル等から拾えるところを考察していく。成果については大阪での国内学会発表する。

調査資料としては、主に国内調査を行う眞嶋が用いる研究書・マイクロフィルム資料 204,000 円を計上する。

研究会を東京で 4 回ほど開催することにする。また、一度関連する研究を進めている研究者を招聘し、講演と同時に研究成果の検討を行うこととする。年度末までには報告書と同時に、出版可能な形での論集をとりまとめる。研究成果や資料の郵送費を計上する。

研究の成果

[22 年度]

大石は、19 世紀末のオスカー・ワイルドが編集した *The Woman's World* (1888-1890) を中心とした雑誌やカタログにおけるオートクチュール女性服の表象を文化記号として解説していった。その一方で『パンチ』をはじめとした庶民的な眼差しを掲げる新聞メディアにおいては、既成服をはじめとする女性の服飾の社会的表象について資料読解を進めた。

既製服が流通する一方で、女性雑誌には根強くパターン(型紙)が付録としてつけられていた。19 世紀後半に顕著となるのは、こうしたパターンあるいは服飾の提案に、積極的に流行のデザインを取り入れていったことである。昔はこのパターンに着目し、デザイン史の観点から女性の服飾への意識の変容をさぐっていった。とくにファッション雑誌に広く寄稿し、また編集作業も行っていたピール夫人の服飾関連の文献の読み込みを行った。

眞嶋は、こうした新しい服飾業界の再編成を、経済史の観点から *Drapers Record* を資料として読解しながら、20 世紀初頭から 19 世紀末までに遡って考察を行った。雑誌をはじめとするジャーナリズムが服飾業界の流通や消費に対して大きな変化を誘発していく過程が明らかになった。

こうした基礎資料についての考察について意見を交換しながら、次年度はさらなる資料の読み込みを行い、全体的枠組みを明瞭にした上で、9 月に主催する国際学会を通して研究発表する予定である。

[23 年度]

19 世紀後半のピール夫人が書いた家政本や類似書、家庭向け雑誌、ファッション雑誌、ファッション雑誌には、保守的ながらも、古い伝統の殻を破ろうとする新しい服飾デザインが見受けられる。オスカー・ワイルドが編集した *The Woman's World* (1888-1890) や、庶民的なまなざしを持つ『パンチ』においてさえもそうした傾向は窺える。ファッション雑誌には型紙がついており、女性たちはそれらを用いて新しいスタイルの服を身にまとうことになっていく。それは新しい生活習慣、新しい生活スタイルを身に着けようとするジュスチャーでもあった。同時にそれは新しい室内装飾勃興の時代とも重なる。そこから、とくに中流階級女性たちが消費文化の中で獲得したモダンな趣味と社会に対して自らの存在意義を見出そうする意識が解説できる。

19 世紀末のこうした傾向は実は 1920 年代および 1930 年代の消費文化において興隆するオートクチュールを予兆するものとして考察できる。こうした新しい服飾業界の再編成の原点を経済史の観点から 19

世紀末までに遡り、その上で戦間期におけるオートクチュールの隆盛が、服飾業界の産業と流通によってもたらされただけではなく、デザイナーたちの個人的ネットワークやそれによって築き上げたブランド力によって消費活動を刺激した理由によることが明らかになった。

[国際学会] 国際学会では、米国カリフォルニア工科大学ジョン=ブルーア教授に「文化経済史」とも呼ぶべき学術的に求心力のある新研究領域の確立へ向け、非常に有用な視座を与えてくれる基調講演を、英国オクスフォード大学教授で消費を切り口に経済史の新しい視座を明確にしたアヴナ=オファ教授と、繊維・ファッション史を消費文化の包括的な視点から再検討した英国ハートフォードシャー大学ジョン=スタイルズ教授にも基調講演を行っていただき、公募により 20 数名の参加者が報告を行い、国内外の研究者が一堂に会する中で活発なディスカッションが展開された。ブルーア教授は、国際シンポジウム以外にも、3月18日に東京大学・イギリス史研究会で講演(タイトル: Sexual Scandal and British Politics 1760-1830), 22日に東京女子大で講演(タイトル: Art and Spectacle in Late Eighteenth & Early Nineteenth Century London), 23日に名古屋大学で講演(タイトル: Burke, Wollstonecraft and the politics of the sublime) をこなし、広範にわたって研究者との学術交流を行った。

[24 年度]

24年度の調査は23年度3月に学習院大学において主催した国際学会「消費文化の歴史-好奇心と物質への欲求の系譜-消費の嗜好はどのように形成されてきたか？」での成果と問題点について吟味することからはじめた。学会中に参加者などから提起されたさまざまな問題点を明瞭にし、最終年度である本年の調査を効率的かつ有効なものにし、成果の改善を追求するようにした。

菅は、LENS 会議において Reimann School の写真科長であった Ifor Thomas の教え子との交流から Thomas の写真哲学、教育方針に関する貴重な情報を得た上、戦前だけでなく戦後のイギリスにおける商業写真の教育および実践の発展を戦前からの流れのなかで探るといふ新しいテーマにつながる学術的刺激を受けた。大石は19世紀末のファッション雑誌についての調査を継続しながら、20世紀にまで射程を広げた。とくにラファエロ前派と衣装改革との影響関係、消費文化との関係に注意を払いながらファッションの表象と広告について、どのような女性の意識の変化がありえたかを調査した。2月には渡英調査を行いこの点についての報告論文を書いた。また眞嶋は、イギリスのファッション・システムを支えた繊維織物産業の絶頂期から衰退期かけて検討するために、第1次世界大戦前と戦間期のファッション・テキスタイルのデザインや風合い、輸出量、輸出金額、及び輸出先について調査をした。イギリス領植民地における繊維織物産業の設立と現地での織物需要の変化について多角的にとらえて分析し、特にアジア地域では急速に輸出量を伸ばしてきた日本の繊維織物産業との競合関係について、検討した。これまで、繊維織物産業の世界的な拡大は安価な労働力調達のみで説明されてきたが、特に日本の産業との競合を考える上ではデザイン・ファッションの重要性も無視できないとの仮説のもと、産業側が現地のファッション需要をいかに理解していたか、植民地で発行された女性誌や新聞、現地でのマーケット機能に関する聞き取りや博物館の画像資料などを用いて分析している。植民地におけるファッション雑誌等に関する研究はまだ途上であるが、3月にはマレーシアにおいてイギリスの女性誌の発展と絡めて研究報告を行い、さらに伝統衣装の維持と欧米製品アジア製品の流入との関係について現地調査を続けた。

主な発表論文等

[著書・共著論文]

1. 大石和欣「富と貧困、消費と奴隷 — 18 世紀イギリス社会の光と闇」『ヨーロッパ文化の光と陰』(勁草書房)2012 年 3 月
2. 菅靖子「C.S.ピール夫人著作集：世紀末から両大戦間期を生きた女性ジャーナリストの奇跡」『C.S.Peel夫人著作集 別冊解説』(東京: Athena Press, 2010 年 11 月)
3. 眞嶋史叙, Sage Publications, Dale Southerton Ed., *Encyclopedia of Consumer Culture*, (眞嶋史叙著 ‘Consumer Expenditure Survey’) 2011 年, 266-268
4. 眞嶋史叙, Sage Publications, Dale Southerton Ed., *Encyclopedia of Consumer Culture*, (眞嶋史叙著 ‘Clothing Consumption’) 2011 年, 177-179

[雑誌論文]

5. 大石和欣 「ある道路工事人と唯美主義者の肖像—ワイルドの社会主義とアメリカ講演」『オスカー・ワイルド研究』11 号, pp.67-76 (2010 年 12 月).
6. Shinobu Majima, ‘Globalization and the Knowledge of Fashion: the cultural network of designers, journalists and consumers during the interwar years’, *Gakushuin Research Journal of Economics*, forthcoming (2011).
7. 眞嶋史叙, 「グローバル・ファッションと教養化—戦間期のミューズ達と国際消費文化ネットワークについて—」, 『学習院大学経済論集』, 査読無, 48 巻 1 号, 2011, 65-82

[国際会議発表]

8. 大石和欣 “Sentiment, Consumerism, and the Culture of Giving in Eighteenth-Century Britain” *History of Consumer Culture 2012 Conference, Genealogies of Curiosity and Material Desire: How Has Consumer Taste Been Constructed?* [国際学会口頭発表およびプロシーディングズ](2012 年 3 月) pp.115-21.
9. 菅靖子 “Green Debates on ‘Industrial Conservatory’: Great Exhibition and Its Influence on the Consumer Culture of Plants” *History of Consumer Culture 2012 Conference, Genealogies of Curiosity and Material Desire: How Has Consumer Taste Been Constructed?* [国際学会口頭発表およびプロシーディングズ](2012 年 3 月) pp.29-34.
10. 菅靖子 招待講演 “LENS 2012: Out of the Shadows” (於ウェールズ国立図書館) 2012 年 11 月 23-24 日
11. 眞嶋史叙 “British Fashion and the World Market: when did France take over?” *History of Consumer Culture 2012 Conference, Genealogies of Curiosity and Material Desire: How Has Consumer Taste Been Constructed?* [国際学会口頭発表およびプロシーディングズ](2012 年 3 月) pp.83-88.

[国内講演]

- 1 2. 大石和欣 「富と貧困、ショッピングと奴隷 — 18 世紀イギリス社会の光と闇」中京大学文化科学研究
所主催文化講演会， 於中京大学文化科学研究所 2011 年 11 月 15 日

参考文献(とくに重要なもの)

Drapers Record, various issues.

Harrod's Stores Catalogue 1895, reprinted, Newton Abbot, 1972.

Ladies Monthly Museum, various issues.

Myra's Journal of Fashion and Needlework, various issues

Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, reprinted, Tokyo, 1996.

The Queen: Ladies' Newspaper

Second Report on Commercial Relations between France and Great Britain: Silks and Wine, (by John
Bowring), HMSO, 1835.

The World of Fashion, various issues.

Ashmore, Sonia, *Muslin*, London: V&A Publishing, 2012.

Barthes, Roland. *The Fashion System*. Trans. Matthew Ward and Richard Howard. London: Vintage Books,
2010.

Beetham, Margaret, and Kay Boardman. *Victorian Women's Magazine: An Anthology*. Manchester:
Manchester University Press, 2001.

Beward, Christopher, Edwina Ehrman, and Caroline Evans, *The London Look: Fashion from Street to
Catwalk*, Yale University Press, 2004.

Burman, Barbara. *The Culture of Sewing: Gender, Consumption and Home Dressmaking*. Oxford: Berg,
1999. Beward, Christopher, *Fashion*, Oxford, 2001.

Coopey, R., S. O'Connell, and D. Porter, *Mail Order Retailing in Britain*, Oxford University Press, 2005.

Crane, Diana, *Fashion and its Social Agenda*, Chicago, 2001.

Crane, Walter. *Ideals in Art*. London: George Bell, 1905

Cunningham, Patricia A. *Reforming Women's Fashion, 1850-1920: Politics, Health, and Art*. Kent, OH:
Kent State University Press, 2003.

Dakers, Caroline, 'James Morrison: 'Napoleon of shopkeepers'', in C. Beward and C. Evans, eds.,
Fashion and Modernity, Oxford, 2005.

De Marly, Diana, *Worth: Father of Haute Couture*, New York, 1980.

Godwin, E. W. *Dress, and its Relation to Health and Climate*. London: William Clowes, 1884.

Harte, Negri, 'On Ree's Cyclopeda as a Source for the History of the Textile Industries in the Early
Nineteenth Century', *Textile History*, vol. 5 (1974).

Jeremy, David J., 'International changes in cotton manufacturing productivity, 1830-1950s', *The Fibre that
Changed the World*, Oxford University Press, 2004.

Kusamitsu, Toshio, *British Industrialisation and Design, 1830-1851*, unpublished thesis, 1982.

- Jenkins, David, 'The western wool textile industry in the nineteenth century', *The Cambridge History of Western Textiles*, 2003.
- Laver, James, *A Concise History of Fashion*, London, 1969.
- McCracken, Ellen. *Decoding Women's Magazines*. Basingstoke: Macmillan, 1993.
- Mendes, Valerie and Amy De La Haye, *Lucile Ltd: London, Paris New York and Chicago, 1890s-1930s*, V&A Publishing, 2009.
- Miller, Michael B., *The Bon Marché*, Princeton University Press, 1981.
- Offer, Avner, 'The British Empire, 1870-1914: A Waste of Money?', *Economic History Review*, vol. 46, no. 2 (1993).
- Richardson, Jane; Kroeber, Alfred L., 'Three Centuries of Women's Dress Fashions: A Quantitative Analysis', *Anthropological Records*, vol. 5, no. 2 (1940).
- Rose, Clare, ed. *Clothing, Society and Culture in Nineteenth-Century England*, 3 vols. London: Pickering and Chatto, 2011.
- Ruskin, John. *The Works of John Ruskin*. Ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. London: George Allen, 1903-05.
- Schaffer, Talia. *The Forgotten Female Aesthetes: Literary Culture in Late-Victorian England*. Charlottesville: University Press of Virginia, 2000.
- Stewart, Mary L., *Dressing Modern Frenchwomen*, Baltimore, 2008.
- Styles, John, *The Dress of the People*, Yale University Press, 2007.
- Wilde, Oscar, ed. *The Woman's World*, 3 vols. London: Cassel, 1880-90.